

令和5年度第2回北九州市総合教育会議 会議録

1 日時

令和6年2月6日（火） 14:00～15:30

2 場所

ホテルクラウンパレス小倉 2階 香梅 （北九州市小倉北区馬借1-2-1）

3 出席者

市長部局：武内市長、稲原副市長

教育委員会：田島教育長、大坪委員、竹本委員、郷田委員、香月委員、中島委員

司 会：小杉教育委員会総務部長

4 議事録

司会
<p>ただいまより「令和5年度第2回北九州市総合教育会議」を開会します。私は、教育委員会総務部長の小杉と申します。本日の会議の進行を務めさせていただきます。</p> <p>また、本日の会議の様子はインターネットにてライブ配信を行っています。</p> <p>ライブ配信でお聞きの皆様は、回線の状況等により、聞きづらい場面がある可能性もあります。予めご了承ください。</p> <p>それでは、最初に、武内市長からごあいさつをお願いします。</p>
武内市長
<p>本日はお忙しい中、総合教育会議にご出席をいただきまして、誠にありがとうございます。</p> <p>教育長、教育委員の皆様におかれましては、日頃から北九州市の未来を担うこどもたちの教育についてご尽力をいただき、深く感謝を申し上げます。</p> <p>先日、2040年に向けてのまちづくりの方向を示す、北九州市の新ビジョンの最終案を公表させていただいたところでございます。時代や環境が大きく変化する中で、今後も北九州市が世界に先駆けて、新たなことに挑戦し、一歩先の価値観を体現するまちであり続けたいという思いを示すとともに、まちづくりの基盤となる人を育てる教育につきましては、こども一人ひとりの個性や多様性が尊重され、本来持っている可能性を発揮できる「こどもまんなか」の教育を推進すると掲げてあるところでございます。</p> <p>そこで、今回検討している次期教育大綱におきましても、誰の価値観も否定せず、チャレンジを応援する。誰かがくれた正解の人生を探そうとするのではなく、自分が選んだ道を正解としてほしいなど、私の思いも、今のこどもたちに伝えていきたいと考えております。</p> <p>本日は、11月に開催しました前回の総合教育会議での議論や、3万件を超える児童生徒のアンケート結果などを踏まえまして、こどもたちのウェルビーイングを実現するための、市長からこどもたちへの約束として、次期教育大綱の案をお持ちしたところでございます。</p> <p>本日は、皆様の忌憚なきご意見を賜ればと存じます。よろしく願い申し上げます。</p>

<p>司会</p>
<p>武内市長、ありがとうございました。 続きまして、田島教育長からご挨拶をお願いします。</p>
<p>田島教育長</p>
<p>教育委員会を代表いたしまして、一言ごあいさつを申し上げます。 武内市長におかれましては、本市の教育に一方ならぬご配慮いただきまして、大変ありがたく思っております。 この総合教育会議において示されます、市長からの教育大綱の策定の動きと合わせまして、市長の教育大綱に沿って、私ども教育委員会で、それを実現するための具体的な計画として作成する教育プランというものがございます。今後5年間の教育の基本方針となるものですが、その教育プランの策定に着手したところでございます。この教育プランでございますが、今年の9月ぐらいまでには、策定をしたいと考えております。策定に当たりましては、こどもたちの声に加えまして、保護者や教職員の声も広く伺いながら、有識者の意見も合わせまして、最終的に作成して参りたいと考えているところでございます。 市長の右手側をご覧いただきたいんですけども、壁の方に、「礎」という筆書きを貼らせていただいております。これは、教育委員会が、今年の一文字という形で、昨年末の仕事納めの日に、皆の総意という形で選んだ言葉でございます。この席におります教育次長が、皆の前で一気にかき上げたものがございます。 この「礎」でございますが、今年はず市長の方から、北九州市全体の大きな新しいビジョンが示されます。それに加えまして、教育大綱というものが市長の方から示され、合わせまして、教育委員会の大きな方針である教育プランが定まって参ります。そういう意味では、今年一年は、こどもたちの未来をつくる礎を築くための一年と心しております。 今後、学校教育をさらに充実させて、発展させるために努めて参りますので、ぜひ市長の方からもご理解、ご協力を賜りたいと考えております。 本日は、どうぞよろしくお願い申し上げます。</p>
<p>司会</p>
<p>田島教育長、ありがとうございました。 本日は、次期北九州市教育大綱の策定についてご協議いただいた後に、いじめの重大事態について報告する予定としております。それでは、議事に入ります。</p>
<p>【協議】次期北九州市教育大綱の策定について</p>
<p>栗原企画調整課長</p>
<p>まず資料1について、こちらは前回11月の総合教育会議で皆様にいただいたご意見をまとめたものでございます。続きまして資料2、こちらは北九州市で策定中の新ビジョン最終案で、先月の議会、それから新ビジョン検討会議に示された資料でございます。 新ビジョンにつきましては、基本構想と、基本構想を実現するために取り組む主要な政策をまとめた基本計画、この2つで構成されておまして、本日の資料では、基本構想が資料の2-1で全文を、基本計画につきましては資料2-2で、教育に係る箇所を抜粋しております。</p>

この新ビジョン案では、目指す都市像といたしまして、繋がりと情熱と技術で一步先の価値観を体現するグローバル挑戦都市と掲げて、「稼げるまち」「彩りあるまち」「安らぐまち」の実現という3つの重点戦略を進めることで、少子高齢化、人口減少などの社会課題に直面しているまちにおいても、まちも人も潤っていく、成長と幸福の好循環を実現していくという方向性が示されているところでございます。

教育は特に「彩りあるまちの実現」に関係が深く、「こどもまんなか」で質の高い教育環境の充実に取り組むということが書かれております。

本日の本題である教育大綱ですが、資料3をご覧ください。次期教育大綱の考え方(最終案)、A3のカラーでございます。前回の総合教育会議でご説明した内容と、皆様からいただいたご意見をもとにこの資料を作成しております。

大綱の策定に当たって考慮すべき要素といたしまして、資料の上の方には、教育を取り巻く様々な課題があり、教育のミッションと新たな時代の要請を踏まえるべきであるということ。そして資料の左の方には、全校アンケートでのこどもたちの声、そして有識者の意見、前回のこの会議で示した次期大綱に盛り込むべきキーワードを記載しております。

こうした要素をすべて踏まえた上で、資料の右下でございしますが、次期大綱の全体像の案を図にして掲載しております。5つの柱を掲げておりますけれども、まず、「①全てのこどもにとって「居心地の良い学校」をつくる」ということが、これからの教育を進める上での大前提であるということ。そして、「②失敗を恐れず挑戦し、志と人間力を高められる環境を作る」、そして「④学校の自律性と教職員のウェルビーイングを高める」。こうした教育環境を学校に整えて、この土壌をベースにして、「③誰1人取り残さない学びと先端的な学びを進める」ということで、こどもたちが本来持っている可能性を最大限引き出せるようにする、そして、この取り組みを進める上では、こども一人ひとりの意見や多様性を尊重する、結果よりプロセスを大事にする、こどもたちが好きなことに夢中になれる環境を作る、学びの機会を保障し、同時に新しい時代に対応した学びも進めると、こうした考え方が重要になってくると考えております。最後に「⑤地域とのつながりの中で、社会全体でこどもを見守り、支え育てる」こうした5つの柱によりまして、「こどもまんなか」で質の高い教育環境の充実に図りたいと考えております。

先ほど新ビジョンの説明でも申し上げました通り、この「こどもまんなか」で質の高い教育環境の充実というフレーズは、市の新ビジョンにも書いてあるものでございまして、大綱の策定に当たりましては、新ビジョンとの整合というところも図っているところでございます。

続きましてこの資料の下の方でございしますが、こうした取り組みを進めることで、今のこどもたちが大人になったとき、これは2040年ごろを想定しておりますが、正解がないと言われるこの先の不透明な時代でも生き抜いていく力を身につけられればよいのではないかと考えております。ここでいう「生きる力」として想定しておりますのは、ここに記載しておりますように、自分なりの価値観・哲学を持ち、周りの人への思いやりと多様性への深い理解を持ち、そして自ら課題を発見し解決する力を持ち、自分の可能性を発揮できるということであると書いております。こうした力をつけることが、一人ひとりのウェルビーイングを実現することに繋がり、そうした未来人材が社会に新たな価値を創造して、様々な社会課題を解決することで、社会全体のウェルビーイングの実現にも繋がっていく、そうした思いを込めて、この次期大綱

案がつくられているところです。

続きまして資料4です。今、ご説明した絵を文章に落とし込んだのが、この資料4、次期教育大綱案でございます。まず、1ページ目の「策定にあたって」というところで背景をご説明して、次の2ページから、5本の柱とその内容を記載しております。この柱と内容につきましては、先ほどの資料3でご説明した通りでございます。なお2ページの左上に凡例という二重線の枠がありますけれども、この資料の中で下線を引いている箇所は、前回の会議でいただいた意見を反映した部分、網掛けは新ビジョンの文言を引用している部分でございます。4ページ目以降は参考です。教育の基本方針である大綱というのは、文章が大まかで具体的なイメージがわきにくいということもあろうかと思っておりますので、どういうことを言っているのかということを補足的に説明して、用語解説もあわせて掲載しているところです。

続きまして参考資料の方に移りますが、参考資料の3、4です。参考資料3は、前回の会議でいただいた意見、そして参考資料4は、新ビジョンの教育関係部分を上げて、それぞれが、この大綱のどの部分に反映されているのかということを示した資料です。言ってみれば、先ほどご説明した資料4、この文案の凡例の逆引きというところです。

最後になりますけれども、次期大綱につきましては、今年度中に策定して速やかに公表する予定でございます。また、先ほどありましたけれども、現在、教育委員会で策定を進めている次期教育プランの方向性の骨格となるものと考えております。

資料のご説明は、以上でございます。

司会

ここから意見交換に移ります。今の説明に関して、ご意見やご感想がございましたら、挙手の上、ご発言をお願いいたします。

大坪委員

今回、最終案としてお示しいただいた教育大綱は、かなり具体的に絞り込んで書いていただいているので、これに引き続いて教育プランを作っていくということは、非常に作業がしやすく、目指すべき方向性にぶれがなく取り組んでいけるので、とても助かっております。

かなり網羅的な要素を、組み入れて作っていただいておりますが、字面を追いかけていくと、ちょっと表面的な話になりますが、一人ひとりのこどもの中に育てていくべき思考性、スキルや能力、そういったものは、かなり細かく記述していただいて、それを実現するために、学校あるいは教育委員会がどういう環境を整えていくのかということについては、かなりの情報量が入っていますが、ボリューム的に言葉が少ないという印象を受けたのが、こどもたち同士が競い合ったり、助け合ったり、そういった相互作用をしていくという視点が、割合的に見ると、少し少ない印象を受けました。ただ記述量が少ないからといって、市長が軽視されようとしている印象ではございません。

例えば、すでに実施されている「スー1★GP」も、3人というチームで行うイベントで、チーム内で支え合ったり、競い合ったり、助け合うというコミュニケーション能力を育成するという視点もあるので、きっとそういう思いもあるのだと受け止めているところです。

そういう意味で、もう少し、こういう場面で友達同士、支え合ったり、支えてもらっていることに友達同士が感謝したり、あるいは場面によっては、お互い競い合うという形で、お互い

の水準を高め合うようなことに対して、どういうイメージをお持ちなのか、お話を聞かせていただくと、私どもも教育プランや具体的な学習活動のモデルを示しやすくなっていくと思っています。いかがでしょうか、少し抽象的なことをお尋ねしております。

武内市長

この5つの柱、①から⑤までありまして、この構造をまずお話ししますと、①が学校で、学校で個々の生徒さんのベース部分が②で、③の部分がスキル。②がマインドで、③がスキルというような構造になっていて、④がそれを助ける教職員の方々、そして⑤が、それを包み込む地域という構造になっておりまして、どちらかという①④⑤が場の概念で②③が学びの概念という構造になっているということをお話をした上で、今大坪先生におっしゃっていただいた、このこども同士の相互の関わり合い、これもものすごく大事なことです。より明確に記載するというのも1ついいと思いますし、そこはおっしゃる通りだと思います。この中にこどもが人を支え、支えられるというようなことも書き方をしておりますし、こどもが挑戦するという過程の中でも、お互いに協力したり、手伝ったりすることは当然大事にされることだと思います。

私の考え方としては、やはり学校教育、これからそのあとに遭遇する人生での様々な経験とか、あるいは社会人として、大人になってからの様々な経験を、その相似形で、学校の場において、人間同士の助け合いもある、ぶつかり合いもある、様々なかかわり合いを経験、疑似体験と言ったらリアルですので疑似ではないですが、そういったものを先行してそこに、いろんな試行錯誤をしたり、模索をしたり、あるいは他者を通じて自分の本来の姿、自分の価値観だったり、どこに感動するのかっていうことを見いだすような、その過程をじっくりできる、過程として非常に重要だなと思います。その部分では、もちろん1つ目は他者との協働や、摩擦も含めて協働ということが1つあります。

2つ目は、他者を經由しての、自らの発見っていうことも、1つあるんだろうと思います。その中で、3つ目がレジリエンスというちょっと即物的な言い方になりますけど、うまくいかないことうまくいくこと両方あるんですが、その中でどうそれを修正したり、立ち上がったたり、工夫をしているのか。それを学んでいく、そういった3つの要素が組み合わされるというのが、こどもたち同士の相互の関わり合いの部分で大事なことかなと考えています。

大坪委員

さらに、どんな学習活動とか、学校の計画に繋がっていくのかという情報をいただいたので、作業がさらにやりやすくなって助かります。

少し意見を申し上げますと、今年は正月に、能登半島で大きな地震があり、改めて、自然災害の恐ろしさとか脅威というか、そういうものを再認識した年だったのですが、災害のときの対策としては、一般的にまず自分で自分を助けるという「自助」、それと、お互いに支えあってくださいという「互助」、そして、公共的なものからの支援である「公助」というのが3層構造ででき上がっている。おそらく今回、市長からいただいている、こどもたちに1回や2回の失敗ではへこたれなく、それでも前に進んでいけるような、逞しいこどもたちを育ててほしい、レジリエンスという言葉で代表的に表現していただいているんですけども、まさにそれが1人で乗り越える力、互いに支え合っていく力、それと、できれば地域の方や学校や、周囲の大人

たちから助けてもらえるような力、やっぱり何層かのきちんとしたサポートがあって、君らを支える力としてはこんなにたくさんの方がいるということは、明確に子どもたちに伝える課題があると思っています。どこかに偏ることなく、満遍なく。おそらく中には、人から頼まれた事は真剣に頑張れるけれども、自分でやりたいことはなかなか見つけられないってこともおそらく何割かはいらっしゃる。そういう子どもには、これだけ多くの子どもたちが、人の役に立ちたいとか思いやりのある大人になりたいとかいう思いを持っているので、そういうときには、周りの人たちあるいは地域住民の方たちが、こういう願いを君たちに持っているんだよということを、可能な限り伝えて、それを自分で納得して引き受けてくれる子どもたちがいたら、そういう活動が進むことによって、自己肯定感につながるような、年間通しての学校行事の整備とか、あるいはそういうことに取り組むことの価値とか人生観みたいなものは、学校の先生達にちょっと頑張ってもらって、子どもたちに情報提供しながら、話し合いながら、自分の人生を考えるきっかけを与えていくことができるよう、頑張りたいと思います。

武内市長

今の大坪先生のお話は、まさにおっしゃる通りで共感するところがございます。今回新しいビジョンの中で、北九州市の目指す都市像として、「一歩先の価値観を体現する都市」というのを入れています。「一方先の価値観を体現するまち」とは何か、「一歩先の価値」とは何か、というところは、時代とともに変わっていきますが、この新ビジョンの中で、「一歩先の価値観」の1つの中核的な例示としてあるのが、「利他」と「能力開花」と「持続可能」ということ、この3つを新ビジョンの中で掲げています。

「利他」は、まさにおっしゃった通り、他者のためにどういうふうに貢献できるかっていう「利他」の考え方。そして、「能力開花」は、それらを通じて自分の持っている力、あるいは思いをどんどん開花させていくという力。3つ目の「持続可能」というのは、先ほど公助互助の話がありましたが、そういった関わり合いの中で人間同士が変わっていく中で、そのコミュニティ、学校もそうですけども、コミュニティあるいは地域自治体が持続可能になっていくという力。まさに「一歩先の価値観」の中で、中核として掲げている価値観も、教育の部分でまさに、今お話いただいたところと合わせ鏡になっているので、その点も踏まえていただければと思います。

中島委員

前回までのディスカッションをすごく丁寧に教育大綱に盛り込んでいただいたと、感謝申し上げます。すごくいろんなところから重要な要素が盛り込まれていて、すごくよく考えてくださったなというのが伝わってきました。

私からは、教育大綱の5番、「地域とのつながりの中で社会全体で子どもを見守り、支え育てます。」というところの、文章の細かいところではありますが、市長の思いを確認させていただきたくて質問させていただきます。

この中に、2段落目の中程の部分の最後の方、「郷土愛の醸成」という言葉があります。おそらくこれは、市の基本構想の中にあるシビックプライドの向上というところと、教育の課題である郷土愛というところを結びつけて、教育に馴染みがある郷土愛という言葉を使っていらっしゃるのかなとは思いましたが、おそらく市の構想とつなげると、単純に郷土愛、郷土に親し

みを持つのではなくて、やはり子どもたちにも積極的にこの市に関与をして欲しいという思いを込めての郷土愛かなと思ったのですが、そのように理解してよろしいでしょうか。

この地域と子どもの繋がりというところで、市長の込められた思いがありましたら改めてお伺いしたいなと思いました。よろしく願いいたします。

武内市長

今おっしゃっていただいたように郷土愛、シビックプライド、あるいは自分たちが生活を営んでいる地域に対する感謝の気持ち、あるいはそれを与えてくれる地域に、どう自分が恩返しできるか、貢献できるかということが1つ重要な要素としてここに書かせていただいて、それがあからこそ、先ほど大坪先生がおっしゃったような共助とか互助が機能するわけですから、そこにしっかりと愛着を持って関わっていく、これが大事だろうということだろうと思います。

あともう1つ、より深くとらえていくと、自分自身がどういう存在なのか、価値観や哲学、あるいは自分の思いをどうやって発見し、自分で自分の人生を正解にしていくというようなスタンスで生きていけるような教育ということを考えていく中で、自分自身がどういう存在であるのか、自分自身が、どういうところで生まれ、存在しているのかということをしっかり見つめていくということも大事だろうと思います。自分自身についての理解を深めていくということが大事で、その際にはやはり、自分のルーツというものを育ててくれる土壌である地域というものに対してしっかりと向き合うことによって、自らのアイデンティティや自分の存在というものに思いを致すという、そういうレイヤーでの意味合いにおいてもその自身が地域に対して関わっていく、貢献をしていくということが大事だろうな。すなわち、自分をしっかり確かめるということは、非常に大事なことだろうと考えています。

郷田委員

私も初めに感想といいますか、教育大綱の中に今までの議論を丁寧に組み入れていただいているなと思いました。

教育大綱の文章に、「子どもたちを、社会を構成する存在として尊重する」と書かれていて、子どもたちは育て上げる対象ではあるけれども、ひとつの存在として、社会の構成員として尊重するというのはとても素晴らしい姿勢というか、考え方のベースだなと感じました。これから子どもたちを育てるというときに、いろんなことを大人側は期待をしますし、こうなって欲しい、ああなって欲しいというのがありますが、子どもは子どもの人生であって、そこを尊重して始まるというのはすごく大事だなと思っています。

翻って、成長して社会に出たときに、大人側も自分たちが、社会の中で尊重されていると必要がある。そういう社会である必要があるなと思っています。

それが教職員であったり、保護者であったり、こういった教育委員会の個人個人であったりだと思っんですけども、そういったところでも、お互いにリスペクトし合えるような形で、この大綱が現実的な教育プランに反映されて、現場の教育活動に繋がっていくといいなと、拝見して感じました。

今、私は民間企業にいますが、社員とかと話すときに、自分自身の考えではなく、誰かの正解を正解として思い込んでしまうところがある、というのを感じます。ニュースなどで、大き

な企業の不祥事などがあるときも、やはり既存の組織や上司の正解を、正解として植え付けられることで、誤った行動が引き継がれている可能性が非常に強いと思っているので、なかなかここは、やはり年嵩の者が若い者を教育するという体制の中でどうやって変えていけるんだろうっていうのは悩ましいところがあるなっていうふうに思います。

このことについて、どんなところが課題なのかとか、その辺りの構想といいますか、お感じのところがありましたらお伺いしたいと思います。

武内市長

今、郷田委員がおっしゃっていただいたところ、まず前段の部分ですね。この議論の中、あるいは最近のワードの中で、「こどもまんなか」という言葉をどう解釈し、定義つければいいのか。これ、割と国全体で「こどもまんなか」とはこういう意味であって、一応定義はあるんですけども、深い意味で書き尽くされているわけではないので、割と私達に委ねられているところもあります。私自身の議論の中でのひとつの思いとしては、今、郷田委員がおっしゃっていただいたように、こどもだからこどもが中心である、こどもの持っている可能性やこどもの特性は尊重する。こどもだから中心だということと、もうひとつは、こどもだから、こどもも構成員のひとり。言い方は変ですけど、こどもも大人のように扱おうという、この両面をここに包含させようという議論、思いが私にあって、こどもだからすべて真ん中だという、もちろん弱い存在、庇護すべき存在であるというところもある一方で、こどもじゃなくてこどもも大人という、このふたつを一緒に両立させていくことがこれから必要じゃないかなと思います。そういう思いを込めています。

それで、今の話にも関連しますが、やはりヒエラルキーを、東洋的な長幼の序という美德もある一方で、ステレオタイプな答えや、観念や社会規範というものを、年長であったり、経験が豊富であるからといって、圧倒的、支配的に、こどもや若者たちに、それを求めていくということ自体が、若い世代、こどもたちの閉塞感であったり、そのまちに対する窮屈な思いというものに私は繋がると思っています。ですから、そういうものを、包容力を持って受けとめていく地域の風土というものを、もうちょっと強化していかなきゃいけないんじゃないか。もうちょっと具体的に言えばもちろん、会社の中で、企業の中で、素人の視点、あるいは知識や経験がないがゆえに出てくるというようなアイデアをみんなでもっと尊重する、市役所の中だったら、新採の人とか若い人たちの意見をより尊重するというような、事業活動の仕方っていうのがまず大事だろうと思っています。

あと、若い人たちがチャレンジできる場をもっと作らないといけなくて、若い人やこどもも、年長の人たちがやっていくことに、その背中を見て学んでいく、あるいは真似ていく、これも大事なことで、むしろ、こどもたちを先に走らせて、あるチャレンジをさせてそれを後ろから、大人たちが応援をする。あるいは、そこから何かこうリスクが生じたときに、バックアップする、失敗したときにそれをしっかりと支えるというような、そういう営みをもっと目に見える形で増やしていくということも必要だろうなと。試させるというかやらせるというか、挑ませるというかそういったもの、随所に見込んでいることもやっぱり大事だろうなと思います。ちょっと抽象的な答え方でうまく表現できたかわかりませんが、そういう思いをもっております。

郷田委員

ありがとうございます。

今、お伺いして、こどもを先に走らせて、失敗してもそれを後押しするっていうのは、大人側にもすごく勇気があるなと思いました。

こどもが発表するときに、ちょっと大人が手直しして、何かうちのクラスいい感じ、みたいな感じにするとかをしない勇気、こどもの自由にさせて、いざというときは、親とか大人が責任をとる勇気というか、そういう風土も大人も持たなくてはいけないなとお伺いして思いました。

武内市長

こういうこと言うと、身も蓋もないかもしれませんが、大人の世界とこどもの世界で連動した相似形みたいなのところがありますから、この世界だけが劇的に最初に開明的に変わっていくということはないので、まさにおっしゃるように、大人の営み、大人の考え方、スタンスっていうのとセットで回していくということが必要だし、そこが、その実験場あるいはその試みの場としての地域ということも、しっかりと大事な要素として考えていく必要があるだろうなと思います。

香月委員

皆様おっしゃられているみたいに、議論を本当に丁寧に落としていただいて、ありがたいと思っています。

その中で、私が最も注目しているところは、正解のない時代に生きる力というところの、自分なりの価値観・哲学に非常に注目しています。結局これが、自分を信じる力のベースになると思います。ここがないと、いろんなことに踏み出す事がしにくいだらうと思います。だから、ここをきちっと自分自身に持たせる、というか持ってもらう。そういったところに結びつけるのは、今までの教育ではなかなか難しかったところだらうと思います。自分なりの価値観・哲学というものについて、市長が何か思っていることがあればお話いただけたらと思います。

武内市長

ありがとうございます。ご指摘、ここが非常に難しいですよ。こうなるように誘っていきたいということはあるながら、その具体的なアクション、方策として考えていくときにどうやって見ていくのかという事だと思うのですが、先ほどから話が出ている、人とのかわり合いのインタラクションの量と質を高めていく、これはまずベースとしてあると思います。

その他に、様々な経験をしたり、本を読んだりっていうことがたくさんあって、その中で自分の中でグルグル回しながら、自分なりに、何に反応する自分なのか、何に怒りを覚える自分なのか、何に喜びを感じる自分なのか、これもやっぱりその回転数を相当やることしかないだろうと思います。そういう中で発見をしていく。その中で私がやはり大事なことは、対話といますか、1人で教科書や勉強に向き合って、あるいは先生から来る情報を咀嚼して、というものではなくて、やはりこの緩やかな対話というのが非常に大事だらうと思います。

私たちは日々の暮らしの中でいろんな事象を持って、そう感じる自分の感情とか自分の考え方を自分の中でグルグル対話している、もう1人の自分と対話しているようなところがあるし、本を読んだり経験したりする中で、自分の中で対話していることもあります。それはもちろん、

内省的な対話っていうのがひとつ、もっと量的に増えなきゃいけない。これだけ情報が、大量投入されている時代だからこそ、内省的な機会っていうのは、大切だろう。ただ、こどもがいきなり内省的に思考に耽るというのはなかなか難しいこともあるかもしれない。それがきっかけとなるような対話や問いかけというもの、先生であったり、地域の人であったり、あるいは友達同士であったり、そういったアナログとといいますか、リアルな、緩やかな対話というか関わり合いの数、これをかなり量的に、やっぱり意識して増やしていかなければいけないと思いますので、そういうところが緩やかな対話の機会をどんどん作っていく。正解がないとか、あるいはシャープな答えが出てくるものじゃないような対話の機会。これを意識的に増やしていくことがひとつの切り口になるのかなというような思いは持っております。

香月委員

やはりファシリテーター的な、教職員であったり、親であったり、友達であったり、そういった関わり合いの中で、だんだんに育っていくのかなというようなイメージを持たれていると理解できました。これがうまくいくことを心から願っています。

竹本委員

私も、今の皆さんのご意見からちょっと感じたことをお話しさせていただこうかと思えます。今、自分なりの価値観・哲学というお話で、市長のお答えをいただきました。価値観とか哲学とか、当然これから成長するにつれて、こどもたちはきちんと向き合っていかななくてはいけない大切な要素であると私も感じております。

ただ、その前に、本来こどもっていうのは本当に好奇心の塊であり、それこそ失敗してもチャレンジする、そういう生き物と申しましょうか、どういう状況であれ、楽しむという姿を親として間近で見えてまいりました。

そう考えたときに、自分なりの価値観や哲学というのはそれこそ、大綱の考え方というところに凝縮して書いている通り、好きなことに夢中になれる環境、またすべてのこどもにとって居心地のよい学校を作ると明記していただいております。

そういった形で、こども一人ひとりが生まれながらに持っている好奇心だとか、個性だとか、そういった生きる力というのをまずは私たち大人が信じて、大切に磨き上げていくような、そういった教育を続けていけば、自分なりの価値観や哲学というのは、自然に培われていくものではないかなと、今お話を聞いていて感じました。

ちょっと話がずれるんですけども、前回の会議とかでも議論いたしました。やはり、それに必要なのは、私たち大人側の意識改革、柔軟な意識の改革なのではないかなと改めて感じました。難しい課題ではあると思うんですけども、12月に視察に行かせてもらった先、また1月に視察に行かれた委員の皆さんもいらっしゃいます。その時のお話として出たのがやはり、先生方のこどもとの接し方、関わり方、そこがやはり一番見習うべきポイント、またヒントがたくさん隠されているのではないかなというお話を委員の中でさせていただきました。

なので、ぜひこれからこういった取り組みを具体的に進める上で、そういったヒントをきちんと生かしていただいて、それで、こういった大人の意識改革というところを重点的に取り組んでいただきたいなと考えております。

その点で1つだけ私の感じたことですが、そのためには、こどもだけでなく大人が、

経験と失敗を繰り返すことで成長するんだっていう、そういったマインドといいますか、そういう姿勢で何事にも望む、そういうふう意識を変えていくべきだと思っているんですけども、ただ言ってもなかなか難しい部分ではないかと思います。やはり意識的にそこは取り入れていくぞと、そういった心持ちで大人は、柔軟な考え方を身に付けていくべきときなのかなと考えております。それが子どもたちだけでなく、1番の居心地のよい学校、子どもだけじゃなくて教職員も可能性を發揮できる居心地のよい場所としての学校を作ることにも繋がるのかなと感じました。

この大人の意識改革という点におきまして、市長のお考えなどをもう少し詳しくお聞かせいただけるとありがたいです。

武内市長

まさにその通りだと思います。こどもの本来の力、好奇心、あるいはレジリエント、そもそもがレジリエントですからね、その力を信じるとおっしゃいましたけど、やっぱりそこが大事だろうと思います。

大人の経験と失敗ですね、もうここはもうまさにその通りで、私自身も失敗もしてきましたけれども、やはりリスクを取ってチャレンジをする人をちゃんとリスペクトできる。あるいは、失敗してそこから立ち上がることをみんなで応援をする。失敗こそ人生で、ひとつ成長する、ひとつ進化するための大きなチャンスだというようなマインドを、大人がしっかりと共有をするということは、今の時代、特に必要だろうと思います。

なので、これも先ほどの郷田委員の話に繋がりますが、私たちの日々の事業活動の中でも、そういう観点からの活動だったり、人材育成だったり、いろんなメンタリングだったりというようなことをやっていく。失敗こそが尊いもので、失敗こそが次への飛躍の大きな原動力になっていくということ。いろんな経験をした後に、それに振り返って気づくわけですけども、それを先見的に私たちが感じている、わかっている大人の包容力といいますか、需要度を高めていかないと。ただ子どもだと、私もそうですけど、なるべく失敗というか、つらい思いをさせないように、痛い思いをさせないように、と思う気持ちも思わず先んじてしまうことも時にあるわけです。それはそれで人情としてあるんですけども、やはりそうは言っても、予想外の失敗をしてきたり、うまくいかなかったり、びっくりするようなことが多々あるので、そういうときにしっかりと包容力をもって受け止めるということ。そういう姿を大人自身がしっかりと賞揚していくということ、これはパラダイムが変わりつつある今、ちょうど、途中にあるなという思いをしております。大人も変わっていかねばならないと思います。

中島委員

教育大綱の中で4番に取り入れていただいた、学校の自律性と教職員のウェルビーイングを高めることが、すごく意味があることだなと思います。

まず1つは、教育自体が持続可能な業界になるようにという思いもあるでしょうし、また教師がレジリエンスの力を發揮できれば、モデリングをできるような存在であるというような、いくつかの要素が込められたものかなと思いました。

市の基本構想や教育そのものに必要なものというところでは、今のような持続可能とかレジリエンスとかも、教師が發揮できるようにというところが1つあると思います。もうちょっと

突っ込んでいくと、今この大綱にあるような教育を実現しようとする、教師にかなりの指導力が求められるというか、教師の期待感がものすごく高い教育大綱のように思いましたので、その中で教師がしっかり尊重されて、健康を保ちながら子どもたちの教育に当たることができるという要素を入れていただいたことに、すごくよく考えていただけているなと思いました。

特に、先ほど出てきましたように、教師自身がパラダイムシフト、今までの教育の考え方を転換する必要があるなというところはもちろんですし、市長のおっしゃるような、子どもたちが将来自分の価値観とか哲学を持ったり、内省的な対応ができるようになるには、やはりその元になるような知識であるとか思考力というものが必須になると思います。

そのような知識とか思考力をしっかりと子どもの発達段階に応じて伸ばしながら、それでも一方ではその価値観にとらわれずに自由な発信ができるような人材を育てられるってものすごく教師に求められるものは高いなと、教育に求められるものがすごく期待されていると受けとめましたので、この4番を入れていただいたことに私自身もすごく感謝しますし、それを教育委員会として受け止めて、どのように教師が持続可能に子どもたちにこのような教育を提供できるかというのを、この4番の柱をしっかり考えながら取り組んでいきたいと考えています。

大坪委員

先ほどの中島委員のご発言に関係してお話しさせていただくと、ぶっきらぼうな言い方ですけど、教育委員会というところで仕事をしていると、この4番の自律的で特色のある学校づくりとか、教職員のウェルビーイングについて、先生たちに提供する情報だったり、制度の変更だったり、研修内容だったりがある中で、ご意見聞いていると、もっとすぐに役に立つ、有効な方法を教えてくれっていうご意見が少なくなく上がってくるんですね。そうしてみると、結局そこで僕らがどっちかっていうと、そういうリクエストに対して答えようとする、答えのある問題に対して、これは手っ取り早いですよっていうふうにして、先生たちもどちらかという、こういうテーマについても、ある意味答えをこちら側から提供して、あまり考えずにやり方を示していたみたいな反省は、実は正直あるんです。そういうことを学校の先生たちが求められていたということも一方にあると。ただ、そういう研修もおそらく一部分必要だと、先ほどの議論聞きながら思うと同時に、ちょっと1歩下がるかもしれないんですけども、「どういう学校運営が本当に皆さんの能力を発揮するのに繋がると思いますか?」「仕事をしていく上で、教師という仕事をしていく上で、皆さんの充実感やウェルビーイングや、そういったものに伝わっていくことに繋がりそうですか?」みたいな、ワークショップとでも言いますか、言い方変えれば、もう哲学的な側面も含めながら、研修の提供というものも、遠回りかもしれませんが、検討していきながら取り組んでいこうと。そうすると、ちょっとずつでも、やっぱり学校の先生が変わらないと、子どもたち本当におそらく戸惑うことになっていくので、そこは子どもたちに求めると同時に、やはり教職員も変わって、できれば、保護者の方たちや、保護者ではない地域住民の方たちについても、その人生の送り方みたいなことについて、教育委員会側からはあまり今まで取りかかってきてない価値観の提供ではあるんですけど、情報提供については少し考えてみたいなのも思ったりもしました。

そういう意味で、機会を見つけながら、みんなと一緒に、市民の方たちと一緒に考えていくことができるような場面を大事にしていきたいなと、そんな思いを受けました。

田島教育長

今ですね、大坪先生がまとめていただいたんですけれども、今回の教育大綱の市長の思い、いろいろと示していただいた思いを、これから教育プランという形で作業に入って、実行計画という形で案を作って参ります。

その時に、こどもだけではなく、やはり合わせ鏡で、こどもたちと一緒にいる学校を構成する大きな要素である教職員、その教職員に対してどういうプランという形で示していくかというのは、大きな宿題として、今、承ったところであります。

とにかく、こどもだけが変わるといことは社会ではありえない話なので、このパラダイムシフトの時代の中で、大人がどう変わっていくか。学校の先生だけではなく、私たち教育委員会もその過程の中にあるということを肝に銘じまして、今から教育プランの策定に移って参りたいと考えております。

司会

少し予定より早く進んでおりますけども、次に進めたいと思っておりますがよろしいでしょうか。活発なご議論、どうもありがとうございました。

次期北九州市教育大綱につきましては、以上をもって協議を終了し、本日の議論を踏まえまして、市長が最終的な取りまとめを行うことといたしますのでご了承ください。

次に報告事項です。いじめの重大事態について、教育委員会学校教育部長が説明いたします。

【報告】いじめの重大事態について

高松学校教育部長

いじめ重大事態は、いじめ防止対策推進法に定められており、いじめにより、生命、心身または財産に重大な被害が生じた疑いがあると認めるとき、また、いじめにより相当の期間学校を欠席することを余儀なくされている疑いがあると認めるときに、速やかに調査組織を設置し、調査を行うものとされています。

また、いじめ防止等のための基本方針では、いじめにより重大な被害が生じたという被害者側からの申し立てがあったときは、その時点でいじめの結果ではない、あるいは重大事態とは言えないと考えたとしても、重大事態が発生したものと報告・調査等に当たるとされています。調査に当たる際には、学校または教育委員会のどちらかが調査の主体となり、調査等を行うとされています。

いじめ重大事態は、昨年度は全国で923件の発生が報告され、年々増加傾向にあります。

そのような中、いじめ重大事態への対応については、北九州市としては、まず、被害児童生徒や保護者の思いを理解し、対応に当たること。そして、調査内容や調査結果について適切に説明すること。さらに、調査結果の報告を受けて、いじめ防止等の体制を見直す姿勢をもつこととしております。

教育委員会が行ういじめ重大事態の調査審議については、北九州市いじめ問題専門委員会条例で、常設の附属機関である、北九州市いじめ問題専門委員会が行うように定めています。

いじめ問題専門委員会の委員は、条例に基づいて、学識経験のある者、その他教育委員会が適当と認める者のうちから教育委員会が任命するとされており、人数は6名以内と定められています。現在は、医師、弁護士、臨床心理士、学識経験者、保護者代表で組織されております。

いじめ重大事態が発生した場合は、委員とは別に、調査等を行う臨時委員を任命し、重大事態の調査を行っております。

調査組織を早急に立ち上げ、児童生徒が1日も早く元の健全な生活を送ることができるように、慎重に調査等を行っております。

令和4年度、北九州市でいじめ重大事態が発生した件数は3件です。現在、この3件について、臨時委員を任命し、いじめ問題専門委員会内に調査組織を設置して、調査等を行っております。その結果は、いじめ問題専門委員会での審議を経て、被害保護者へ報告する予定となっております。その後、保護者からの所見の部分を確認し、報告書等を市長へ提出する予定です。また、報告書の公開については、被害児童生徒の保護者の意向を伺って進めて参ります。

今後も法やガイドライン等に示されている内容に則り、適切に対応し、児童生徒が健全な学校生活を送ることができるように取り組んで参ります。

武内市長

いじめは、被害児童生徒の教育を受ける権利を著しく侵害をするということ、それから心身の健全な成長あるいは人格形成に重大な影響を及ぼすということで、非常に重い問題であると考えております。

ぜひ、被害児童生徒あるいは保護者の皆様の心に寄り添っていただき、いじめの解消、再発防止、そして未然の予防といったところをつなげていただきますよう、安心安全な学校づくり、これを強く願いたいと存じます。

司会

以上をもちまして、本日の予定項目はすべて終了となります。最後に市長から、一言お願いします。

武内市長

改めまして、本日は誠にご多忙の中お集まりをいただき、また貴重なご意見、様々賜りまして、ありがとうございました。

こうした議論の中で、非常に考えが深まり、そして明確になってきたところも多々ありますので、本当に改めて感謝申し上げたいと思います。

今回は大綱案でございますけれども、これを策定した後、具体的に落とし込んだプランの作業に入っていくわけでございますが、そのプランの過程が、今のこの考え方、方向性というものも落とし込む一番大切な、あるいは、また非常に悩ましい部分も多々あろうかと思っておりますけれども、委員の皆様方には今までのご知見、ご経験、またそのお力など様々なものをお借りいたしまして、北九州市の未来を作るこどもたちの教育の新しい時代にふさわしいあり方というものを描いていただきますことを心からお願いをいたしまして、感謝の言葉、そして私のお願いの言葉とさせていただきます。誠にありがとうございました。

司会

ありがとうございました。

これもちまして、本日の会議を終了します。